

稚貝確保に着目したあさり資源の再生活動を振り返って

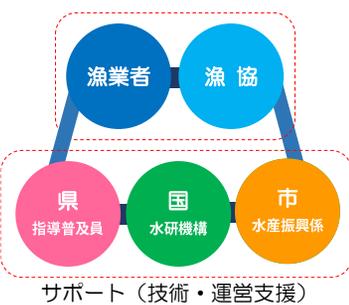
前潟干潟研究会

前潟干潟研究会について

前潟干潟研究会は、日本三景の安芸の宮島と対岸の廿日市市の間にある大野瀬戸の干潟で活動を行う組織である。

当地区は、県内一のアサリ生産地であり、『大野あさり』はカキに次ぐ産品となっている。

当研究会では、近年、海域の貧栄養化・クロダイ等による食害などによって減少したアサリ資源を再生するための試験研究や技術開発を行っている。また、その成果を地区の漁業者に普及することを目的に活動を展開している。



あさり漁業の歴史

大野瀬戸に点在する干潟は、平均 5ha に満たない小規模なものである。この限られた干潟をアサリ漁場として公平で持続的に利用できるよう、古くから多くの工夫がされてきた。

その代表例が 100 年の歴史を有する漁場区割りと、平成 10 年ごろから始まった網掛け保護。漁場区割りによって漁業者間の漁場競合がなくなり、大型サイズまで管理・成長させてからアサリを出荷する意識が浸透した。また、結果として母貝資源を漁場に安定的に残すことにつながった。さらに、網掛け保護によって食害を防ぐ取組みが地域全体に定着し、アサリ資源の減少に歯止めをかけることができた。



前潟干潟研究会の取組み 地元産稚貝の確保

先人の努力によって、一定の稚貝がいれば安定したアサリ資源とその生産が見込める。その一方で、稚貝の供給については広島湾全体のアサリ資源からの効果によるところが大きく、近年、低調に推移する。そのため、当地区では、他産地産の種苗を移植放流することで、これを補填してきたが、全国的にアサリ資源が減少する中、この取組みが難しくなった。

そこで、当研究会では、地元産稚貝の効率的な確保に向けた試験研究を行うことにした。当面の目標は、稚貝 400 万個を確保する技術の確立である。

設立当初の平成 25 年度は、ケアシエル等を用いた「待ち受け型の網袋採苗」を実施したが、上手いかず課題となった。そこで、春先に米粒大のアサリが数多く生息する干潟で、稚貝の集積場所を見つけ、その場所で砂ごと網袋に入れ稚貝を短期間保護・育成する方法「大野方式」を平成 27 年度に考案し、28 年度以降に本格化した。



活動を本格化した 28 年度以降は、調査段階から稚貝密度の低下がみられたことから、①稚貝集積場の干潟を複数選定したり、②稚貝の採取面積を増やす工夫をしたり、技術を深化させた。加えて、1 袋 800 個弱（H28 年水準）の稚貝を確保した時に、目標の 400 万個を達成するには網袋 5 千枚の設置が必要となるが、それを上回る設置数ができる体制を 3 年に亘ってつくった。

年度	稚貝確保の実績			
	設置袋数	参加者数	回収量/袋	総回収量
H27	458	83人・日	1,288	59万個
H28	3,400	170人・日	788	268万個
H29	10,400	530人・日	212	220万個
H30	10,250	565人・日	187	192万個
R01	7,500	416人・日	117	88万個

農林水産祭の最高賞『天皇杯』を受賞

当地区のあさり漁業の歴史や生産方法およびその品質が評価され、令和元年 12 月に農林水産省の地理的表示（G I）を取得した。これまでも大粒のみを選別収穫するという管理意識は地域に浸透していたが、G I 登録によって殻長 35mm 以上とその定義が明確化され、より高度な資源管理と付加価値形成を行う基盤が強化された。

また、今年度、これまでの歴史や我々の取組みが評価されて、農林水産祭の最高賞『天皇杯』を当研究会が受賞することになった。広島県内での水産部門における天皇杯受賞は 43 年ぶりで、今後の取組みの励みとなった。



今後の課題と方針

現在、稚貝の主要集積場の干潟において、アサリの稚貝密度が大きく減少している。その原因として、干潟の底質の悪化が懸念されている。集積場の干潟は、現在、地盤が硬く締まっており、表土 3cm 以下には黒い砂が層状に堆積している。そこで、今年度は、稚貝確保の取組みを中止し、集積場の全面耕うんを実施した。

大野方式による稚貝確保の成果は、その着底量に左右されることから、その減耗要因の究明と対策が喫緊の課題である。今後、当研究会では、その原因究明を協力者を得ながら図るとともに、稚貝確保や網掛け保護のさらなる効率化・簡便化に向けた取組みを進めていく。

アサリ稚貝個体密度（個/m²）

